



東京・秋葉原で無差別殺傷事件

絶望映す身勝手な「テロ」



無差別殺傷事件が起きた秋葉原の電気街では、多くの警察官が見回りをしていた＝11日、細川卓撮影

曖昧で幼稚な怒りの意味

去る8日、買い物客と観光客で賑い、アニメ・ゲーム文化の中心地である東京・秋葉原で残酷な事件が起きた。死者7人を出した無差別殺傷事件である。筆者は一報を自宅でネット上で知った。第一印象は「ついに起きたか一だった」。

むろん、事件発生を予想していたわけではない。しかし最近の秋葉原については物騒な報道が相次いでいた。パフォーマンスが過激になり、規制強化が囁かれていた。他方で若い世代のあいだでは、日本社会への絶望や不満が急速に高まっていた。昨年の論壇の話題は「希望は戦争」と語る若手論客の登場だった。そして、アキバ系と言われる若者文化の担い手と、絶望した労働者やニートの層は、意外と重なっ

ていた。つまりは、いまや若者の多くが怒っており、その少なからぬ数がアキバ系の感性をもち、しかも秋葉原が彼らにとって象徴的な土地になっているという状況があった。したがって、その街を舞台に一種の「自爆テロ」が試みられたという知らせは、

◆象徴的な土地

筆者にはありうることだと感じられたのである。筆者はいま「テロ」という言葉を使った。多くの読者は違和感をもつだろう。テロといえは普通は、何らかの政治的主張を伴った、強い信念のもとでの行動を意味する。今回の凶行にそんな主張があったのか、と。確かに通常の意味での政治的主張はない。容疑者はネットに大量の書き込みを残している。そこには身勝手な劣等感ばかりが綴られている。社会性のかけらもないように見える。

◆疎外感募らる

もしもない。彼が凶行の現場として秋葉原を選んだのは、おそらくはその曖昧さのためだ。もし彼が首相官邸や経団連本部に突っ込んでいたら、だれもがそれをテロと見なし、怒りの実質に関心を向けただろう。彼はその点でいかにも幼稚だった。無辜の通行人を殺してもなにも変わるわけではない。しかしその幼稚さは、怒りの本質にはかかわらない。だから、筆者はこの事件をあえてテロととらえたいと思うのだ。

しかし、逮捕後の調べのなかで、容疑者が職場への怒りや世間からの疎外感を長期的に募らせたうえで、計画的に凶行に及んだことが徐々に明らかになってきている。そこに窺えるのは、未熟なオタク青年が「逆ギレ」を起こし刃物を振り回したといった単純な話ではなく、むしろ、社会全体に対する空恐ろしいまでの絶望と怒りである。不安定な雇用に悩んでいたという報道もある。

◆不可避の社会

しかし、テロリストを厳正に処罰すること、テロが生み出される背景を無視することは異なる。私たちは彼のような「幼稚なテロリスト」を不可避的に生み出す社会に生きている。犠牲者の冥福のためにも、その意味をこそ真剣に考えねばならない。

あずま・ひろき 71年生まれ。著書に『動物化するポストモダン』『ゲーム的リアリズムの誕生』（ともに講談社現代新書）ほか。共著に『自由を考える』『東京から考える』（NHK出版）など。

東浩紀

（批評家）

